

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第六二七号  
平成二十五年八月一日発行（第百十六卷第八号）

# ホトトギス

八月号

一千四百号



## 俳句随想 〔三百七十四〕

汀子

平成二十五年八月号でホトトギスは千四百号を迎える。百十六年八カ月という気の遠くなる歳月が経ったことになる。その間、大勢の俳人がその中で学んで来たホトトギスである。虚子は素晴らしい俳句作家を輩出して来た。年尾もそうである。そしてホトトギスという俳誌は迷うことなく虚子の唱えた俳句は「花鳥諷詠」であり、その短い詩を作る方法として客観写生を提唱して来た。年尾もその道貫いた。私、汀子も同じ主義主張を踏襲した。私は自分の作品に責任を持てるようにと努力して来たつもりである。そしてこれからもその大道を過ちなく歩んで行く。私の命の限りホトトギスで誌友の皆様と共に勉強して行きたい。私の後は稲畑廣太郎が皆様とともに「ホトトギス」を支えて行く。彼はすでに立派な指導者である。私はもう安心している。望むらくは彼の健康である。それは本人が一番よく承知しているので私は何一つ助言はしないことにしている。これらは全て自分の意志で守っていかねばならない健康である。「ホトトギス」の主宰は厳しい毎日であると私は思う。努力をしなければ毎月の出版に支障をきたす。まだ私も努力して行かねばならない。誌友の皆様、「ホトトギス」をよろしくお願い申し上げます。

# 句日記 汀子

八月七日 大阪倶楽部

稲妻の走る気配を蔵す闇  
秋立ちてこれより軽き息遣ひ  
つづけねばならぬリハビリ秋に入る

八月七日 綿業倶楽部

岳麓の旅路はるけし月見草  
運転のためのリハビリして涼し

八月十五日 夏潮句会

秋近し心に兆す力あり  
朝顔の蔓の行方にある力  
左手の汗を右手で拭くことも  
蝸の声止み山雨至りけり

八月六日 ロイヤル俳壇

星祭癒ゆる願ひを托しけり  
明らかに夜空晴れをり星祭  
稲妻の気配沈めて夜の更けし  
力湧きはじめし予感秋近し  
剩へ残暑かこちてをりしこと

清交社出句 二句

のり固き浴衣ほぐして着こなして  
又の目を約す三瓶の星月夜

# 廣太郎句帳

廣太郎

白南風やぐわんばつてゐる君がゐて

八月九日 土筆会

八月二十一日 草木瓜会

生身魂あの日を語る重き口  
初秋のロンドンよりの風清し  
芭蕉林陣地築きし日のことを  
生身魂平和の鐘に涙して

八月十六日 登高会

八月二十二日 目黒学園句会

片陰といふバス停の時刻表  
じつとしてゐても汗汗汗汗汗汗  
蜘蛛の罫の今日は開店休業中  
こんな日は蚊もよう人を刺しまへん  
秘密基地めきて金魚の出入口  
目眩して暑さだんだん遠ざかる  
あぢさゐの終の輝き供華として

踊の手熱気を搦め捕つてをり  
聖護院大根を蒔く京言葉  
秋の蟬呼応丸ビル新丸ビル  
阿波踊目立つ小柄な佳人かな

八月十八日 東北ホトギス俳句大会

八月二十五日 ホトギス社吟行会

中元や十年振りといふ絆  
手火花に二分後の關待つてゐる  
中元の包み三越高島屋  
君とする線香花火明る過ぎ  
手火花の燃えれば映る知らぬ顔

八月五日 野分會菅屋例会

あどけなき七夕紙の文字躍る  
みちのくの玄関口や秋涼し  
鯛に突つ込むゴルフボールかな  
踊の輪アロハアロハと広げゆく  
爽やかに地獄極楽説かれたる  
新涼の風国宝を磨きゆく

八月二十六日 野分會東京例会

中元や十年振りといふ絆  
手火花に二分後の關待つてゐる  
中元の包み三越高島屋  
君とする線香花火明る過ぎ  
手火花の燃えれば映る知らぬ顔

八月二十日 朝日カルチャー若草句会

八月二十八日 若水句会

熊蟬を抱きて記念樹膨らめり  
八月五日 虚子記念文学館投句

八月六日 カトリック新聞選者吟

立秋の風は昨日を遠くして  
庭園の空を統べたるあきつか  
きちかうの一輪園の要とし  
とんぼうの縫れて風の軽くなる  
落し物見付かる君に秋涼し  
里帰りして踊子となりゆけり

南瓜積み上げられて閉店セール  
南瓜煮る嫁はいらぬといふ弟  
祖父伐りし七夕竹を今年又  
カンナ燃ゆまだまだ冷めぬ都心かな  
あなたへは願の糸を高々と  
七夕や月を歩きし人逝けり

# 雑詠

## 廣太郎 選

人の輪の外にをりけり卒業子 神戸 山田佳乃  
 野に遊びいつか一番星の空 同  
 その先にある初蝶の森の闇 同 橋本くに彦  
 星座なる定点二つ春の星 東京  
 形なすことをためらひ春の雲 同  
 土に音水に音して落つ椿 同 立村霜衣  
 梅の香の重さに蕊のさ揺らげる 神戸  
 焼肉屋街春昼を濃く煙る 同  
 なめらかに晴れなだらかに山笑ふ 同 河野美奇  
 茫と月ミモザ明りの上にあり 東京  
 花びらのはらと苔庭春障子 同  
 松の影笹の風音春障子 同 古賀しぐれ  
 朝ざくら淡海の空は水のやう 奈良  
 奥琵琶の蒼の息づく花吹雪 同  
 竹生島しづめてをりぬ花の闇 同  
 春泥に加へて雨の句碑披き 長岡 安原 葉  
 山路駆け抜け来し車春の泥 同  
 春泥を避け行く人に続きけり 同

釣り上げししろがね色や波うらら 神戸 涌羅由美  
 潜水艦眠るドックに燕来る 同  
 花冷に時の止まりし城下町 同  
 春陰や奥へ飛石小さくなる 香川 湯川 雅  
 聞き慣れて来し鶯を聞き直す 同  
 花器透けて水透けてゐるチューリップ 同  
 花過ぎてゆく夕風の中に立つ 東京 今井千鶴子  
 ほつほつと話して雨の桜見て 同  
 春宵を発止と打ちて止む太鼓 同  
 末黒野にぴしりぴしりと雨つぶて 熊本 岩岡中正  
 地の果てのやうな風吹く末黒かな 同  
 人生のごと末黒野の照りかげり 同  
 熟寝して白鳥帰る時まぢか 米子 中村襄介  
 春泥を歩める馬の沈まざる 同  
 初蝶の翅の頁を開くごと 同  
 若者の気力もみ合ふ裸押 福山 竹下陶子  
 振り上げし力抜けぬ雛の椀 同  
 下萌えて卒寿の花鳥発信す 同  
 夕闇を待つ一力の春障子 同  
 影と影また触れ合ひて苑うらら 同  
 上州の残花許さぬ風となる 同  
 よく走る妹の手の風車 東京 田丸千種  
 春陰や鏡の中の瓶歪む 同  
 汝も吾も歌詠み人よ初蝶来 同

# 雑詠句評（七月号より）

中正・憲明・保佳  
葉・むつみ・千鶴子  
美奇・とほ歩・眞理子  
静龍・廣太郎

## もう一度戻りて隅の踏絵見る 熱海 嶋田一步

私は毎年早春のころ天草で踏絵を見るのだが、これほど心痛むものはない。外は藍より青く明るい天草の春潮だが、資料館の中は春寒く薄暗い。人々によって踏まれて摩り切れた踏絵が、「信仰とは何か、罪とは何か」、ときには「生きるためには、構わないから踏みなさい」と、問いかけてくる。

この句のポイントは「もう一度戻りて」であって、一度見て過ぎたあと、まるでこの踏絵から声がしたかのように引き戻されたのである。「小さなる小さなる主を踏まさるる」（中村汀女）の句に見るような心の痛みが、作者を引き戻したのである。作者の心の深部まで描いた佳句である。（中正）

今では博物館等でしか見る事の出来なくなった「踏絵」を作者は御覧になったのである。レプリカではなく実際使われた本物の迫力をまざまざと感じられたのであろう。そして一度立ち去ろう

としたが、何かに呼び戻されるように戻ったような印象で描かれている。季節の迫力が痛切に伝わってくる。（廣太郎）

## 川風のひと撫でしたる獺祭 神戸 山田佳乃

獺が川からあげた魚を、岸とか岩の上へていねいに並べる。人間がものを供えて先祖を祭るに似ているところから獺の祭という。吹きおこった風が、その上をわたる。「ひと撫でしたる」と描く。ひと撫では、風の吹きよう。そう感じたのである。静かな時が過ぎてゆく。ニホンカワウソの生きた姿が確認できたのは、昭和五十四年夏、高知の新莊川が最後に三十四年前のこと。ついに絶滅種に指定された。こののちは、みえぬものを描かねばならない。見えぬものを見出す。豊かな感受を必要とする。この一句、みずみずしい一つの方向を示してくれている。（憲明）

幻想的な季節であるが、見事に現代に甦らせている。近年日本獺は絶滅したと言われているが、人によつては本当に「獺祭」と思しき獺の営みを見た事があるようだ。人間の目から見ると確かに何か宗教的な儀式のようにも思われるかも知れないが、本来この句のように自然の恵みに満ち溢れているのだ。（廣太郎）

天地有情

点描画描きて鴨の浮寝かな  
 神の留守ここにもありぬ地震の痕  
 偲ぶる兄も虚子忌の一仏  
 み吉野の谷の夜明けの別れ霜  
 虚子塔の椿いかにと思ふのみ  
 あの頃は良かりしと思ふ椿かな  
 寒明も雪を恐れて住める町  
 新雪の足跡で知る獣道  
 まつすぐに日差し来てをり牡丹の芽  
 しつかりと色つつみぬて牡丹の芽  
 北風に立つ富士こそ威風堂々と  
 この雪の富士の噴く日を怖れずや  
 吹かずともいづれか花は散るものを  
 色々な顔目に浮かぶ彼岸かな  
 早逝の父とこの梅見し記憶  
 わが老のいつまで続く日脚伸ぶ  
 日に一度訪ねゆくホーム春めける  
 独り居の又独り言つ春寒し

東京 稲畑廣太郎  
 同 長岡 安原 葉  
 同 東京 今井千鶴子  
 同 樺原 稲岡 長  
 同 熱海 嶋田 一步  
 同 相模原 木村 享史  
 同 東京 田村 元  
 同 徳島 上崎 暮潮  
 同 仙台 赤川 誓城  
 同

虚子選

満開の花にひとりの夜となる  
 花冷の心にたたむ一忌日  
 福笹に卒寿きらめくものばかり  
 夜桜の氣息の燃ゆる篝かな  
 去つてゆく時を去らしめ落花舞ふ  
 生きてゐることを続けて春めきぬ  
 ふるとは祈ることなり初ざくら  
 つれてゆく影もあたたかなりしかな  
 すかんぼを囓めば懐し過ぎにけり  
 啓蟄の水の中にも動くもの  
 猫だけの知つてゐる道路地の春  
 夜あそびの猫の足跡春の泥  
 妣そこにほほゑんでゐる雛かな  
 春暁の夢かうつつか妣笑まふ  
 死は旅の終りにあらず西行忌  
 潮引いて人寄せてくる干潟かな  
 堂々と老いて桜の大樹なる  
 夜桜に倦み星数へゐたりけり

龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同 福山 竹下 陶子  
 同 大阪 蔦 三郎  
 同 熊本 岩岡 中正  
 同 神戸 後藤 立夫  
 同 東京 橋本くに彦  
 同 神戸 三村 純也  
 同 静岡 須藤 常央  
 同 神戸 立村 霜衣  
 同

# 天地有情句評

汀子

厳しい雪に阻まれる町の寒明け。

まっすぐに日差し来てをり牡丹の芽 熱海 嶋田一步

自然の恵み。

神の留守ここにもありぬ地震の痕 東京 稲畑廣太郎

この雪の富士の噴く日を怖れずや 相模原 木村享史

何処に起こるか分らない日本の地震。神の留守が語る。

富士山が噴火するかも知れないと流布。

偲ばるる兄も虚子忌の一仏 長岡 安原 葉

吹かずともいづれか花は散るものを 東京 田村 元

虚子忌が忌日になった兄上小木菟さんを偲ぶ。

やがて散る桜に風よ吹く勿れと願う。

虚子塔の椿いかにと思ふのみ 東京 今井千鶴子

わが老のいつまで続く日脚伸ぶ 徳島 上崎暮潮

横川の虚子之塔に植えられた椿を偲ぶ。

老いを誦い日脚が伸びる期待を持つ。

寒明も雪を恐れて住める町 榎原 稲岡 長

(以下略)